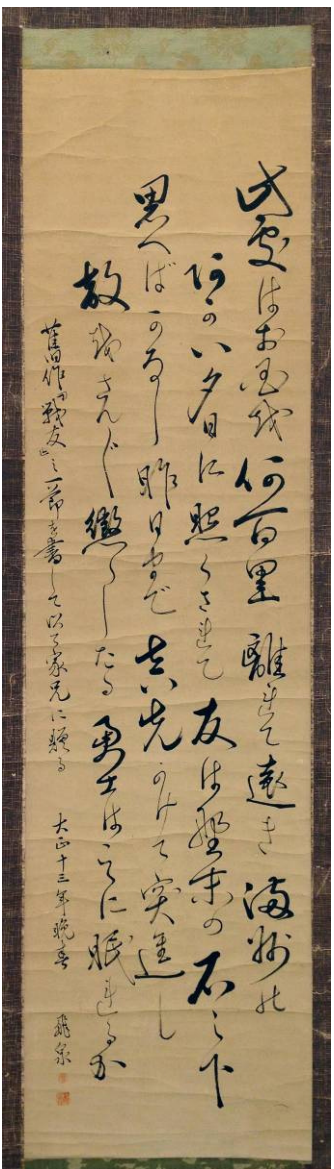


# 戦友

- 一 ここはお国を何百里 離れてとほき満州の  
赤い夕日に照らされて 友は野末の石の下
  - 二 思へばかなし昨日まで 真先駈けて突進し  
敵を散々懲らしたる 勇士はここに眠れるか
  - 三 あゝ戦の最中に 隣りにをった此友の  
俄かにハタと倒れしを 我はおもはず駆け寄つて
  - 四 軍律きびしい中なれど これが見捨てて置かれうか  
「しつかりせよ」と抱き起し 仮繙帯も弾丸の中
  - 五 折から起る突貫に 友はやうく顔上げて  
「お国の為だかまはずに おくれてくれな」と目に涙
  - 六 あとに心は残れども 残しちやならぬ此からだ  
「それぢや行よ」と別れたが ながの別れとなつたのか
  - 七 戦すんで日が暮れて さがしにもどる心では  
どうぞ生きてゐてくれよ 物など言へと願うたに
  - 八 空しく冷にて魂は 故郷へ帰つたポケットに  
時計ばかりがコチくと 動いてゐるもなさげなや
  - 九 思へば去年船出して お国が見にぞなつた時  
玄海灘に手を握り 名をなのつたが始めにて
  - 十 それより後は一本の 煙草も二人わけてのみ  
ついた手紙も見せ合ふて 身の上ばなしくりかえし
  - 十一 肩を抱いては口ぐせに どうせ命は無いものよ  
死んだら骨を頼むぞと 言ひかはしたる二人中
  - 十二 思ひも寄らず我一人 不思議に命ながらへえて  
赤い夕日の満州に 友の塚穴掘ろうとは
  - 十三 くまなく晴れた月今宵 心しみく筆とつて  
友の最期をこまくと 親御へ送る此手紙
  - 十四 筆の運びはつたないが 行燈のかげで親達の  
読まるる心おもひやり 思はずおとす一雫
- 五車楼書店刊「戦友」明治三八年(一九〇五)より。現代と異なる仮名使いもありますが、原文のまま掲載しました。

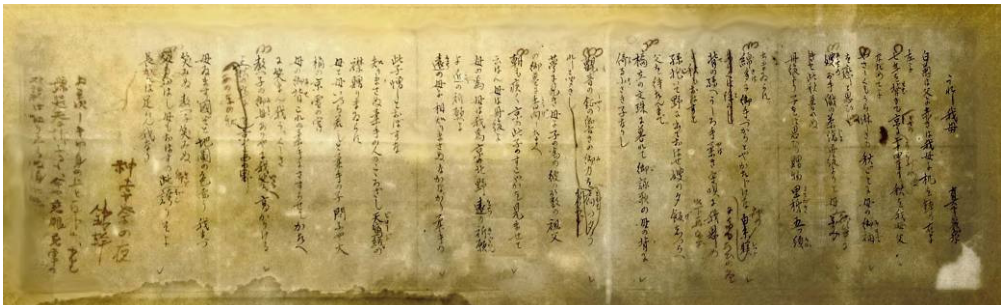
行きながらみながら人はほほゑみぬ  
歌にさまよふ 宮川つゝみ



飛泉直筆 ここはお国を 掛軸 (真下飛泉資料室保管)

裏庭の小ねりといひし柿の味  
故郷の味と得も忘れざり

山多き丹波の國の朝霧は  
物を思ひて行くによきかな



飛泉歌稿(与謝野鉄幹の朱書が入る)河守新町藏(真下飛泉資料室保管)

